

生老病支

ひょうごの現場から

病院や薬局の薬剤師が担う調剤作業の一部を、ロボットに任せ動きが兵庫県内でも広がっている。自動化装置の導入に伴い、現場では調剤ミスの削減や患者の待ち時間短縮などにつながっているという。
(勝浦美香)

調剤ミス激減、待ち時間も短縮

薬のピッキングロボット導入



1箱5秒で

神戸市灘区にある「水道筋薬局」。患者が待つソファの奥に、存在感を放つガラス張りの小部屋がある。内部は両側の壁が棚になっており、箱に入った薬品がずらり。1500種類の薬剤の出入庫を担うピッキングロボットだ。

患者が持参した処方箋をバーコードで読み取ると、即座に機械が動き出す。棚から迷いなく薬を取り出し、隣接の調剤室に届ける。1箱にかかると時間はわずか5秒だ。

同薬局の運営会社「メディ

カルユアーズ(神戸市灘区)は4年前、海外製のロボットを改良し、初めて導入した「梅田薬局」を大阪・梅田に開設。21年には2カ所目の「ロボット薬局」となる水道筋薬局を開いた。同薬局では、患者の待ち時間を従来の3分の2に短縮できたという。



ピッキングロボットを導入した神戸市立医療センター中央市民病院薬剤部。左側の壁一面が装置で、薬が保管されている＝同市中央区港島南町2

県内でも広がり 薬剤師、綿密な服薬指導可能に

同社は今後もロボット薬局を、兵庫や大阪にオープンさせる予定という。

役割の変化

ピッキングロボットの導入は、医療機関でも変化をもたらしている。医師の働き方改革の一環として、医師の仕事の一部を薬剤師などが担う「タスクシフト」が進む中、総合病院など大規模な医療機関では業務の効率化を実現し、綿密な服薬指導や病棟対応など、より高度な役割を薬剤師が担うようになっていく。



「水道筋薬局」のピッキングロボット＝神戸市灘区水道筋6

「生老病支 ひょうごの現場から」は第4月曜掲載。生「老」病を巡る医療の話題や、前を向いて「支」え合う人たちの取り組みを紹介します。

神戸市立医療センター中央市民病院(神戸市中央区)もそんな医療機関の一つ。同病院薬剤部は、メディカルユアーズの梅田薬局を見学し、21年に同様のロボットを取り入れた。導入後は、処方前の点検で修正できたレベルの調剤ミスが8割近く減少。他の業務に充てられる時間も増えた。

将来的にピッキングロボットはさらに導入が進むとみられる。では薬剤師はどう変わるのか。中央市民病院の室井部長は「投与後の効果や、副作用の出方などを見ることで、薬を『科学』することが大きな仕事になると考える。調剤だけでなく、安全な薬を『育てる』職業へ変化していくだろう」と予想している。

兵庫県立はりま姫路総合医療センター(姫路市)でも昨年、同じロボットを導入。本間久美子薬剤部長(53)は「当直中の急な調剤など、人的エラーが起りやすかった場面にも安心感が生まれた。患者の状態に合わせた服薬を細やかに提案したり、医師からの相談に応じたりする時間が増えた」と評価する。

神戸新聞報道部医療・科学チーム

FAX 078.360.0629 iryou@kobe-np.co.jp

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。